
ヤコブ・ザントナーのミュンヘン・モデルの考察

ー都市の理想的姿とは何かー

平澤宙之（前橋工科大学）

都市は形成・発展するに伴い、混乱に対する秩序の回復を目指して様々な規則を定めるのが常である。発表者は一例として、1489年に制定されたドイツ・ミュンヘンの建築条令の内容を理解することに努めてきた。その過程で、1570年頃に制作されたミュンヘンの木製都市模型(以下：ミュンヘン・モデル)の存在を知った。シュトラウビンクの旋盤工であったヤコブ・ザントナー（1530頃ー1585頃）によって、1568年から1574年にかけて制作されたバイエルンの主要5都市の模型の一つである。これらの模型は、バイエルン公アルブレヒト5世の命によって制作されたもので、教会を中心として、人々が住み集い、商業活動が発展してきた16世紀のバイエルンの諸都市の繁栄と名声を模型として記録したものであるともいえる。

一方ミュンヘン・モデルが制作された前後には、ミュンヘンの中心部であるマリエン広場を描いた絵画が散見される。具体的には1568年、1613年、1634年にマリエン広場での祝祭や30年戦争の混乱を描いた版画、舞台画が対象になる。都市は市民の帰属意識を繋ぎ止める器であり、それらの絵画はアイデンティティを育む情報媒体であった。これらは都市における出来事の正確な叙述が主たるテーマなので、背景になる建築群の表現にわざわざ意図的改変を加える必要はないと考えられる。ところがミュンヘン・モデルにおける該当するマリエン広場の建築群の造形をみると、絵画表現とは屋根形状に明らかな違いがあることに発表者は気づいた。果たして、この相違は一体何を意味するのか。

絵画史料にみる、マリエン広場に立ち並ぶ建物の屋根は、いずれもその向きが一樣ではないのに対し、ミュンヘン・モデルでは建物の屋根は、広場に対して軒が揃えられ、統一的に造形されている。この相違の意味は、上記の建築条令の内容を鑑みることでも明らかになる。15世紀末以降のミュンヘンでは、火災予防や相隣関係の観点から、建物の形態や材料を規定し、屋根の向きは広場や通りに軒を向けることを誘導基準として定めている。今日の狭隘道路の拡幅をめぐる問題と同様に、一朝一夕にこの種の規定が徹底して実行されたはずはなく、長い時間を要することは想像に難くない。都市はその意味でいつも過去と未来のせめぎあいをもたらすカオスを呈する。

ミュンヘン・モデルはしかし、マリエン広場の整った街並を表している。このような造形の意図的改変の背景には、建築条令による都市整備の将来像が投影されていたのではないだろうか。それとも現実を認知しつつも、ザントナーの自由な創作意欲が発揮されたのか。ミュンヘン以外の諸都市を再現したザントナーのモデルにも注目する必要があるだろう。本発表では、都市の秩序理念の反映としての当時の建築条令を軸に、ザントナーの造形意図を探り、近代に移行しつつあるヨーロッパ都市の理想的姿について考察を行う。